

評伝

頭山満 (二)

— 大アジア主義への傾注 —

岩間 浩



朝鮮の金玉均亡命の際に、福沢諭吉も頭山の玄洋社も共に金を支援したが、福沢の「我が国は隣国の開明を待つて亜細亜を興す猶予なし。西洋の文明国と進退をともし」すべしとする「脱亜論」に対し、頭山らは、アジア諸国を同胞と見、あくまでもアジアの西洋植民地状態の解消と独立を支援とする「興亜論」を採った。英国を先頭とする西洋列強が、東洋諸国にとって不平等な条約を押し付け、民衆に十分な教育を与えず、かたくなな清国の鎖国的政策につけこんで、アヘン持ち込みによる民族弱体化政策を謀り、国内の勢力を分断させて国力を弱体化させる分割統治といった、巧みな植民政策が東洋諸国で行われていたが、道義を第一義とする頭山にとって、西洋列強のこうした覇権主義はとうてい我慢のならないものであった。大正一三（一九二四）年の米国による「排日法案」なども許しがたいものであった。

『頭山満翁正伝』は、頭山を代弁してこう記している。「彼らの文化は科学の文化であり、功利主義の文化である。この文化を人類社会の間に用ゐたものが即ち物質文明である。物質文明は飛行機爆弾であり、小銃大砲であつて、一種の武力文化である。歐洲人はこの武力文化を以て人を圧迫する。これを中国の古語では霸道を行ふといふのである。わが東洋においては従来霸道文化を軽蔑し、この霸道文化に勝つた文化を有してゐるのである。この文化の本質は仁義道德である。仁義道德の文化は人を感化するものであつて、人を圧迫するものではない。又人に徳を抱かしめるものであつて、人に畏れを抱かしめるものではない。斯かる人に徳を抱かせる文化は、わが中国の古語では之を王道といふ。亜細亜の文化は王道の文化である」。

頭山自身も「大西郷遺訓を読む」でこう述べている。「日

本が道義の大本とならんければならぬ。それが日本の世界に国するの大使命ぢや。そして先づ近いところで支那と印度と相提携して、立派な仁義道德の理想国を作るのぢやな⁽²⁾」。

そこで以下に、具体的に頭山らによる中国の孫文並びに蒋介石支援とインドのチャンドラ・ボース支援を中心に頭山像を追っていく。

1 孫文支援

孫文（字・孫逸仙）（一八六六一—一九二五）は、中国広東州の中農の家に生まれ、やがて香港の医学校を首席で卒業、マカオ・広州で開業したが、漢民族を支配する清朝に対し、民族意識を強くし、医業を離れて革命運動に専念するようになる。

日本では、議会政治家の犬養毅（一八五五—一九三二）が、中国における革命の動きに強い関心を持ち、大隈外相を説いて外務省から調査費を出させ、宮崎滔天（一八七〇—一九二二）らに南中国の実情を調査させた。宮崎らは孫文がロンドンを離れて日本に来ることを知り、急遽帰国して、明治三二（一八九九）年三月に孫文と待望の会見を行うことができた⁽³⁾。宮崎滔天は、熊本出身で、徳富蘇峰の大江義塾、東京専門学校（のちの

早稲田大学）英学部、熊本英語学校などで学び、兄の影響で中国革命を支援し、革命的アジア主義者になろうという志を立てていた。この会見で宮崎は孫文の思想、見識、情念に強く魅了され、以後同志となり、孫文の日本拠点作りに狂奔する。この年、犬養毅は、清国との関係悪化を気遣う外務省を説き伏せて、孫文の東京滞在の許可をもらい、彼を玄洋社の平岡浩太郎、頭山満らに紹介し、その協力を求めた。その結果孫文は、日本における有力な援助者を得ることになる⁽⁴⁾。かつて犬養毅は民党の立場、頭山は政府寄りの立場と、立場を異にしたが、以後、両者はその立場を離れて、アジア諸国の独立のために共働することになる。宮崎は孫文を伴って頭山を訪れ、両者は相知りあい、終生固い信頼を保ち続けた。頭山は孫文と会うなり、その人物の尋常ならざるを見抜いた。彼は孫文について、「日本に来た時の孫先生は三十台、蒋介石は四十ちよつと。孫さんは一見してその人を知る。志は、天下にあり。一身、一家を念とせず。楽しみは読書、金銭は念とせず⁽⁵⁾」と評している。また、頭山を通して、玄洋社員で炭鉱事業に成功した平岡浩太郎や安川敬一郎らが、亡命中の孫文の財政支援を行うに至る。頭山はこのころのことをこう語っている。

「孫か、あれは近来での人物じゃ。自ら信ずる所厚き

ものがあつた。俺の行く方について来いという風じゃつた。私欲の念などは絶えて無かつたね、その辺なども他とは異なつておつた。人の先に立つ男じゃつた。孫は俺の家の隣に住まわせた。往き来の出来る様に隣家と俺の家の間の壁を打ち抜いて、そこから往き来して朝晩話し合つた。孫は(合計)四年間程居つた⁶⁾。(一部現代かなづかいに改めた著者)。

東京を拠点とする明治三〇年のフィリピン独立運動支援の失敗や、明治三三年の広東・惠州での蜂起失敗の後、明治三八年、東京での三派(興中会、華興会、光復会)合同による「中国革命同盟会」が結成され、孫文が総理に選ばれ、機関誌『民報』を発行して政治綱領として民族・民権・民生の「三民主義」を掲げた。このころ、日本には清国留学生が多数おり、その中に黄興、蒋介石など革命を志す者がいた。この会の結成式のための秘密会議は、赤坂の玄洋社員・内田良平(一八七四—一九三八)宅で行われた。日本における革命志士の動向を警察などが監視していたが、霊南坂の坂本金彌氏の別荘をこっそり借りて、首尾よく「中国同盟会」を組織し、孫文は総裁に、黄興が実行部長に、宋教仁・張継らは幹事となつて、各地方との連絡、運動の実行に当たることになり、東京に本部を、上海、香港、新嘉坡^{シンガポール}らに支部を設け、革

命工作を促進し、後に、機関誌『民報』を発行して、章炳麟^{へいりけん}(一八六九—一九三六、孫文、黄興と並ぶ「革命三尊」の一人)、汪兆銘^{わうせうめい}(一八八三—一九四四、一時孫文の側近)らが首脳となつてこれに力を注ぎ、日本その他から中国内部に続々同志を派遣して革命運動を進め、その



神戸オリエンタル・ホテルでの頭山満(前列右)、孫文(中央)、大久保高明(前列左)、後列右より藤本尚則、李烈鈞、戴傳賢、山田純三郎(藤本尚則『頭山満翁写真伝』より)

結果第一革命になった。その際、頭山などが上海に赴き、孫や黄等の革命運動を陰で援助した。⁽⁷⁾ なお、ちょうど明治三八年の五月に、日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を殲滅させるということがある、この事件は孫文はもとより、東洋の独立を志す人々を大いに鼓舞した。

孫文は、大正一三（一九二四）年一月に日本を再度訪問したときに、後世に残る神戸での演説「大アジア主義」中で、日露戦争が始まった時、自分はヨーロッパにおり、（日本軍勝利を）全ヨーロッパは悲しみ、英国人は眉をひそめたが、スエズ運河で働くアラビヤ人たちは、歓喜したことを述べ、「ヨーロッパの文明は進歩し、科学も工業も進歩し、武器も強大で、どうしてもアジアはヨーロッパに抵抗できず、永久にヨーロッパの奴隷にならないければならないと考えていました。ところが、日本人がロシア人に勝ったのです。ヨーロッパに対してアジア民族が勝利したのは最近数百年の間にこれがはじめてでした。この戦争の影響がすぐ全アジアに伝わりますと、アジア全民族は、大きな驚きと喜びを感じ、とても大きな希望を抱いたのです」（一部簡略化した著者）と振り返っている。

日露戦争は明治三七年二月に始まり、これに呼応して「満洲義軍」が形成され、翌年八月のポーツマス条約調

印によって終結したが、超えて明治四四年「辛亥革命」時期には、「満洲義軍」参加者の蒼野らが東京から武昌へとせ参じる。大連からも参加者があり、湖北・湖南から毛沢東を含める大勢の学生が集まる。これに対して北京政府は袁世凱^{えんせいがい}の革命軍討伐軍を派遣する。組織編成も弱く、訓練も少ない革命軍は敗れたが、南京では革命軍が勝利し、中国全土に革命の機運が満ちる。

この情報を得た孫文は、急ぎ米国から帰国し、南京で臨時大統領に選ばれ、翌年一月一日に中華民国が発足した。いわゆる「辛亥革命」である。

中国革命同胞会メンバーに、日本から玄洋社メンバーや宮崎滔天、北一輝ら⁽⁸⁾が加わり、革命支援に奔走した。明治四四年一月にまず犬養が中国に渡り、続いて二月に頭山が渡った。五七歳の時である。頭山の影響力は、革命を目指す中国人及び在留日本人に及んだ。上海租借地を拠点に活動中の、利権中心の日本不良浪人たちが租借地の治安を乱していたが、「頭山満が玄洋社の一行をつれて到着したというだけで、その威風は不良浪人の策動を制圧した。まじめに革命を援助しようとする志士浪人は、革命党に対して、大きな発言権のある頭山の周辺に結集して、その意見を統合することになった」⁽⁹⁾。「革命戦線を擾乱する不良浪人には剛勇無双の玄洋社壯士を使

者に立てて、即時退去を命じてまったく鎮圧した¹⁰。この時、中国に渡った頭山と犬養は、袁世凱との妥協に走ろうとする「南北妥協案」に反対だった¹¹。

また、もしこのとき、フランス革命時のように、外国の国家権力が革命制圧を目的に干渉の軍を動員すれば、革命勢力はこれに対抗すべくもなかった。日本陸軍の將軍たちは、山縣有朋をはじめとして、すべてとわいていほど中国の共和主義に反対で、中国に共和政が出現するのを望まなかった。そこで、陸軍の要人を歴訪して、日本の中国への干渉的出兵反対を強く主張したのが、玄洋社の別組織「黒竜会」(その名は満洲とロシアの間を流れる黒竜江に由来する)の内田良平と玄洋社の頭山の僚友・杉山茂丸すぎやましげまる(一八六四—一九三五)であった。ついに、時の西園寺内閣は、不干渉政策を表明して出兵しなかった。このように内田や杉山の説得工作が成功した背後には、頭山・犬養が自ら渡海して、革命戦線に臨んでいる事実、その指導下の日本浪人らが決死敢闘して革命を援助している事実があった。これが軍部への説得工作に、大いに迫力をもつことになった。頭山にとつて、隣国が共和政になろうと、日本国体への信仰が絶対的なものであつて、革命援助の信念は微動だにしなかった¹²。

南京での孫文に対し、北方にいた軍閥の袁世凱は、革

命政権との妥協を申し入れてきた。頭山をはじめとする日本の浪人たちはこぞつて、このマキャベリストとの妥協に反対し、頭山は、東京帝大の国際法学教授の職をなげうって革命政府の顧問になっていた寺尾亨(一八五八—一九二五)と共に、南京に孫文を訪ね、袁世凱との妥協反対、北上中止の勧告を行った。「孫文が北京に乗り込むことになると、下手をすれば殺されかねず、決して孫文は北京に行くべきではなく、反対に袁世凱を南京に呼び寄せるがよい」と頭山が孫文に諄々と説いた¹³。犬養もまた、後に同様の勧告をした。頭山にとつて袁世凱は、韓国独立党の盟友・金玉均を追放した当事者であり、金暗殺の扇動者と考えられていたのである。結局この忠告に従つて孫文は北京行きを思いとどまったものの、軍資金不足で人材も不足していた孫文は、袁世凱と妥協せざるを得ず、日本側をいたく失望させた¹⁴。この時を以つて頭山はいったん帰国し、革命の破たんを予言した。

結局、妥協の結果孫文は大統領職を袁世凱に譲り、袁世凱は独裁支配を強化した。孫文は、大正二年春、前中華民国臨時大統領として来日し、日本各地で大歓迎され、二月から三月にかけ約四〇日間滞在した。この間、福岡市の玄洋社や、熊本県荒尾市の宮崎滔天家を訪れて歓迎を受けた。頭山は東京での歓迎会で孫文と再会した。

孫文が中国に帰ると、事態は暗転していた。三月二〇日に孫文と並ぶ革命家の同志・宋教仁が上海で袁世凱の刺客に暗殺された。この結果、革命派は反袁世凱で結束し、七月に孫文を中心に各地で挙兵し、「第二革命」を起したが、武力、資金力で勝る袁の軍に鎮圧された。救いを求めて孫文は日本に向かったが、袁との関係を深めていた日本政府は、孫文の入国を認めない方針であった。神戸港からの電信で事態を知った萱野長知の相談を受けた頭山は、彼に金銭を持たせ神戸港に急行させた。菅野は、刑事や新聞記者の目をかいくぐって孫文を信濃丸から小舟で連れ出して逃れた。一方で頭山は、犬養に依頼して首相・山本権兵衛を説得させ、山本にしづぶ孫文の亡命を認めさせた。船が岸壁につくころ、きわどいところで内密に上陸させるといふ許可が下りた。⁽¹⁶⁾このようにして、孫文は、東京・靈南坂（現・港区赤坂）の頭山邸、隣接する海妻邸、寺尾邸という三名の福岡出身者の家にかくまわれ、暗殺の危機から救われた。この時、隠れ家・海妻邸で日夜、袁世凱の放った刺客から、護衛として守り抜いたのは、「玄洋社の豹」と呼ばれた中村三郎（天風）であり、滞在費は玄洋社社員で明治鋳業社長の安川敬一郎（一八四九—一九三四）がもった。⁽¹⁷⁾

孫文は東京で、大正三年に国民党を改組して「中華革

命党」を組織し、党総理に就任する。また、東京の梅屋庄吉邸で、梅屋夫妻が媒酌人となり孫と宋慶齡との結婚式が行われ、犬養、頭山、内田良平、宮崎滔天、小川平吉ら五〇名ほどの日本人が出席してその結婚式を祝わった。⁽¹⁸⁾結局孫文は「第三革命」のために帰国する大正五年四月まで、二年と二六〇日間日本に滞在し、その生命が頭山らによって守られたのである。その後、大陸に渡った孫文は、「第三革命」を起して、袁世凱の帝政運動を挫折させる。やがて彼は、大正一三年、中国国民党第一回全国代表大会に臨み、連ソ、容共、扶助工農の三大政策が決定され、反帝国主義・反軍閥を明確にし、また、各地の演説で「三民主義」政策を明らかにした。彼は一月に日本を再度訪問し、神戸オリエンタル・ホテルで頭山と会見した。頭山はこの時、日華両民族が結んで、インド独立のために闘えば、日華の国民感情は友好的なものになること、だが、この共同戦線は、ただ西洋への敵愾心で結ばただけではいけない、解放戦勝利のものは、決して敵愾報復の精神などに支配されない高度の文明世界を築かなければならないことを語った。⁽¹⁹⁾これが孫文と頭山の最後の会談であった。その後、孫文は神戸で歴史的「大アジア主義」の演説を行ったが、その論旨は、言葉こそ違っても、この会談で頭山が孫文に語ったとこ

ろと、ほとんど同じであったと言える⁽²⁰⁾。主旨は、アジア諸国は、西洋の覇道的民族支配を廃して、アジアに共通な王道思想に基づく、連帯と諸国の自立を目指すべしというものであった。この演説後、孫文は帰国し、四か月後に北京で病に倒れた。頭山は友人総代として、菅野長友を派遣しなぐさめたが、孫文は大正一四年三月一二日に肝臓がんで逝去した。享年五八歳であった。最後の言葉として、「革命いまだ成らず」が伝えられた。新中国国父として、孫文の壮大な中山陵(中山は孫文の号)が南京で造営され、「英霊奉安祭」が昭和四(一九二九)年六月一日にその場所で営まれたとき、頭山・犬養らは国賓として迎えられ、南京国民政府主席・蒋介石ら要人と共に参列し、また、同夜の感謝の歓迎晩さん会にも出席した⁽²¹⁾。その後、昭和一〇年三月一二日には、東京・明治神宮外苑の日本青年会館で孫文「十周年忌慰霊祭」が行われ、哀悼の神事が執り行われた。頭山は賛助代表として出席、上野精養軒における追悼の晩餐会では、中華民國公使らの謝辞ともに頭山は約二〇〇名の参加者の前で挨拶した。挨拶嫌いの頭山にとっては異例のことであった⁽²²⁾。

頭山は、同志らと共に後に国父と呼ばれる孫文を困難な時期を通して、終始一貫支え続け、アジア諸国独立の

英雄らを通して、アジア諸国の独立を強く願っていたのである。したがって、明治四三年八月二日に調印された日韓併合に頭山は不満を感じていた⁽²³⁾。

2 インド独立運動の志士ビハリ・ボースへの支援

東洋諸国への先進列強国による植民地支配に憤慨し、東洋諸国の独立運動を支援しようとする頭山の意図は、中国・孫文を越えて、インド、フィリピン、ベトナム、アフガニスタン、エチオピアへと広がった。ここでは、特にインド独立運動の志士ラーズ・ビハリ・ボース(Rash Behari Bose 一八八六一一九四五)を取り上げる。

ボースは、明治一九(一八八六)年にインド・ベンガル地方に生まれ、幼少期にカルカッタ(現コルカタ)北部の仏領シャンデル・ナゴ(現チャンドン・ナガル)で育つ。彼が一五・六歳のころ、インドの大乱を描いた『サラット・チャンドラ』を読み、インド独立運動に目覚める。その小説は主人公が国のために命を捨てるというテーマを扱ったものであり、ボースはこれを読んで、国のために犠牲になろうと決心し、軍人になって英国に対して革命を起そうと考えた。軍人になる夢は果たせなかったが、仲間たちにこの理想を語った。折しも、日露戦争が起こり、日本の勝利に力を得、多くのインテリ青

年が、インドが独立国になるべきだと考えるようになったので、ボースは青年運動の指導者となって、武力革命を計画し、大正九（一九二〇）年に日本に亡命するまでその計画実行に従事した。²⁴この間彼は、インドの森林研究所化学部門で働き、明治四三年には、森林研究所営林署長に昇進する。翌年、ベンガル地方の独立運動指導者 M・L・ロイ（一八九三—一九五四）と出会い、また、英国の文化・思想を批判する宗教的愛国者オーロビンド・ゴシユ（一八七二—一九五〇）を知り、大きな影響を受ける。大正元年一二月、デリーへの遷都を祝うパレードの最中、ハーディング総督に爆弾を投げつけ重傷を負わす事件を起こす。翌年五月、イギリス官憲にボースの素性が知れたため、逃亡生活に入り、彼の身には多額の懸賞金がかけられる。大正四年二月二日に、ラホール兵営の決起を発端とする北部インド全域にわたる革命を企てたが、事前にこれを英国側が察知したために失敗に終わり、日本への亡命を目指す。

それまでの首都カルカッタ（現コルコタ）は民衆における独立の機運が強く、植民地政府はカルカッタを危険地帯と見て、首都をデリーに移すに至った。

ちょうどこのころ、著名なインドの文学者・思想家の R・タゴール (Rabindranath Tagore 一八六一—

一九四一) が日本に行くというインド紙の予告記事を読んだボースは、この機会を利用して、自分がタゴールの親戚で、日本に学びに行くこととして、P・N・タゴールという偽名を使って切符を購入し、大正四年五月、日本郵船の讃岐丸に乗船しカルカッタを出港した。これは功を奏し、カルカッタやシンガポールでの官憲の調査をすり抜け、香港でも危ういところをなんとか通過し、神戸の税関もパスし、新橋に到着した。ボースは、昭和一四年初版の、藤本尚則『頭山精神』（大日本頭山精神会発行）収蔵の、彼の回顧録「頭山先生に助けられた話」で、頭山とボースの出会いを以下のように述べている（一部現代かなづかいに改めた）著者。

「丁度その頃に支那の孫文が日本へ亡命して来て頭山先生、寺尾先生などの世話になっておりました。その孫文のところへ米国に居る支那人の友人から私が日本に来るといふ手紙が来て居った。（中略）孫文は前から私を捜して居りました。所が私は知らないのです。（中略）それならどんな人か逢ってみよう、印度の問題には多少共鳴するかもしれぬと考えて、孫逸仙の所に行きました。逢つて見ると非常に喜んで、あなたが何処に来て居るか」と、東京中をサンバぐ探して居った。と話してくれた。『どうせこの儘では隠れて居られない。其中暴露てしまうか

ら今の中に日本の色々な指導者に会って置いたら宜からう。第一は頭山満、それから寺尾さんなどを私が紹介しましょう」と、孫文が例の宮崎滔天氏(宮崎龍介氏の父)―日本の孫文の友人でありました。其人に連れられて、初めて頭山先生のところへ行つた。その時は日本語も何も分らないので英語で話した。宮崎滔天氏が少し宛頭山先生に通訳する。それから寺尾さんにも会つて色々話しました。頭山先生に会つて十日と経たない十一月二十八日に退去命令が来た。その退去命令にはビー・エヌ・タートルと書いてあるがどうして私であるということが日本政府に分つたかと色々想像もし、調べもして見た。(中略)直ぐ孫逸仙のところへ行つたら、『それは危ないく、もう見付かった。余程気を付けなければならぬ』。それから一週間も経たない中に六本木警察署から呼出があつた。(中略)直ぐ孫逸仙の所へ行つて相談し、頭山先生の所へ行つて、先生暫ういう訳です。とその命令を出しました。頭山先生は斬く考えて居られて、『できる限りお力沿へします』と静かに言われた⁽²⁵⁾。

のちにボースをかくまうことになる中村屋の相馬黒光は、「先生はいつもの大きな静かさで聴かれて「そうか」それから「できるだけ尽力しましょう」とほつりと言われた。先生はそういう風の方で、一言でも余計なことは

仰しやらない。孫逸仙から聴いて知っているボースは、先生の一言を力強く感じた。先生が一言でもやって見ようと言われたら、ほんとうにやる考えがあつてのことで、決して軽々しく口を開く方ではない⁽²⁶⁾と回顧している。

その後、ボースが新聞人の有力者を訪問したことなどで、この件で各新聞が政府を攻撃し、閣僚の中には内閣がつぶれても退去させるべきではないと強く主張する者があり、大隈首相は病氣になつて寝込んでしまった。期限が切れる前日の一二月一日に頭山からボースに来るように連絡があり、(赤坂靈南坂の)頭山邸に行くと、刑事が四名ほど付いてきて、頭山家に入ると、外で待つていた。頭山宅にはすでに二〇人ほどが詰めており、ボースと、同志のインド人青年ハランバ・L・グプタが入室するとすぐ、いきなり二重マントを着せられ、(玄洋社員)の宮川一貫に連れられ、台所を通り、狭い路地を抜けると大きな(やはり玄洋社員)の杉山茂丸の自動車に乗せられた(頭山家と寺尾家は隣接し、つながつていた)著者。中には、支那浪人の佃信夫と(新宿パン店)中村屋主人の二人がいた。その後、明るい夜店に案内されすこし休んだ後、今度は番頭に、ボースが着用したマントを着せて乗らせ、再び自動車で東京中をぐるぐる廻つて、半蔵門かどこかで車を降りた。運転手に人物を

わからせないための替え玉工作であった。

一方、頭山宅では、刑事が待くたびれており、夜二二時ころに女中が門を閉めようとすると、刑事が女中にインド人の客について尋ねたが、もう帰ったとの答である。刑事は頭山に、先生、逃がすとなると私どもの首が飛びます、と言うと、「君たちの首はどうなつてもよいじゃないか。そのためにインド四億人の民がすくわれるではないか」との返事であった。

三か月後、時の外務大臣・石井菊次郎及び小池政務局長と、頭山及び寺尾亨（元東京帝国大学法科大学教授）の四名が赤坂の三河屋で会見し、英国大使館にわからないように、ボースを政府として保護することになった。このようにいきさつをボースは述べた後、少年時代に抱いた夢であるインド及びアジア諸国の独立のために努力する旨の意気込みを語っている。⁽²⁸⁾

当初、ボースと、インド人のもう一人の同志グプタとが新宿中村屋敷地内裏にある西洋館二階の六畳間（アトリエ）にかくまわれることになったが、トイレはあるものの、日中もカーテンでしめきられ、外出もできず、形は牢屋に幽閉されたような状態であったため、グプタは耐え切れず、大川周明宅へと疾走してしまう（彼はその後渡米してメキシコへ渡った）。しかし、ボースはその

環境を意に反さず、耐え忍ぶことができた。⁽²⁸⁾ このようにして、ボースは、新宿中村屋（パン食店）の相馬愛蔵・黒光夫妻の家のアトリエに隠れ住み、相馬家の庇護を受けるとともに、他所を転々として、六年間ほどの地下生活を送ることになる。

ボースは逃亡生活のあいだにほとんど独力で日本語習得に努め、小学国語読本巻一二を読破するまでになっていたが、英語が話せる連絡役がどうしても必要であった。しかしその仕事に頭山配下の者が当たれば目につく。かといって事情の知らぬ者には頼めない。ちょうど相馬夫妻の娘・俊子が女子学院の高等科に進み、寄宿生活をするうちに英語が堪能になっていた。

隠れ家に通ううちにある日、頭山からボースとの結婚を頼まれていた俊子は、自らボースとの結婚を決意する。⁽²⁹⁾ 大正七年のことであった。媒酌人は、頭山満夫妻がつとめた。こうして、長男・正秀、長女・哲子が生まれた。ボースは大正一二年に日本に帰化し、晴れて表に出られる身になったが、それまでの練り返された転居に、狭い部屋、日光の当たらない生活と、心身の過度の緊張から、妻俊子は弱り、大正一四年に亡くなってしまった。

その後ボースは、『月刊日本』に評論を書いたり、昭和元（一九二六）年の全亜細亞民族会議（長崎会議）に

インド代表として出席したりすると共に、日本に滞在するインド人青年同胞の面倒を見た³⁰。国士館でも教鞭をとった。昭和二年、中村屋に喫茶部ができると、本場インドカレーを教え、この文化サロンの人々と交流する。インドカレーは今では新宿中村屋の看板商品である。昭和一二年七月に日中戦争が勃発し、日本は、昭和一六年一二月、太平洋戦争に突入した。ボースは昭和一七年五月のバンコク会議でインド独立連盟の総裁に就任。インド国民軍の最高司令官に就任するも、インド国民軍内で、ボースは日本の傀儡だという不協和音が表面化し、また結核に侵される。翌年、ベルリン亡命中の、ナチス・ドイツに庇護されたインドの大物革命家・チャンドラ・ボース (S. Chandra Bose 一八九七—一九四五) が秘密裏に來日すると、六月、ビハリー・ボースは東京・帝国ホテルでチャンドラ・ボースと対面し、自ら進んで、自分より年少であるが、新進気鋭のチャンドラ・ボースにインド独立連盟総裁の座を譲り、七月のシンガポールでの独立連盟大会で、総裁の交代が正式に決定された。これによってインド国民軍が内部統一された³¹。

個人的にはボースは、長男正秀を第二次世界大戦末期の沖繩戦での玉碎で亡くし³²、哲子のみが残された。

ボースは頭山らに保護されたことに終生感謝の心を抱

き、恩人たちを毎年一度は招待して、新宿・中村屋で謝恩の会を開き、日本語で心のこもった挨拶をした。『頭山満翁写真真伝』には、昭和七年における謝恩の会の写真と感謝の言葉を話すボースの言葉が残っている。彼は以下のように語った (一部現代かなづかいに改めた著者)。

「私は一九一五年政治上の理由の下に変名して日本に亡命避難した。(中略)「頭山翁に会った時、丁度印度の昔の仏教聖人に会ったような感じがした。白い髭を生やしてじっとして沈黙を守ってすわって居られる頭山翁の姿は、印度の古代の聖者を思い出させたのだ。其後日本政府から退去の命令を受け、危い所を頭山翁に匿くまわれ、後に自由になって今日に至って居る。私が頭山翁を一番尊敬する点は、頭山翁の人類に対する愛情と云う事である。日本人であつても外国人であつても、何所の国の人でも悩み苦しんで居る人の為に頭山翁は何時でも心配されて居るのだ。(中略)一度私は或る米国人の友人を連れて行って翁に紹介したことがあつた。其時、『先生此の人は人間が非常に好くて人にだまされてばかりいます』(と云うと)翁はそれを聞いて静かに次の如く云つた。『そうですか、それはだますよりだまされた方が好いです』。私が其の事を英語で米国人の友人に通訳する



ボースによる謝恩の会（於新宿中村屋、昭和7年）
 右から頭山夫人、犬養毅、ボース（後列）、頭山満、内田良平、大崎正吉
 （藤本尚則『頭山満翁写真伝』より）

と、友人は涙を流しながら、「斯ういふ言葉は私として始めて聞いたのだ、斯ういふ場合に一般的な人は将来に於てだまされぬ様にと云うべきものなのに、翁の「だますよりだまされた方がよい」と云うた事を聞いて翁が精神的にどれ程進んで居られるかと云う事を確信した」というのであった。（中略）人によつては、翁を浪人の親方或は政治家である様に解する者も居るが、然し翁は其等よりずっと優しくて全人類に対する愛情を持つて居られる⁽³³⁾。

ボースの娘・樋口哲子（ボース哲子の結婚後の姓名）は、『父 ボース』の中で、「父が最も落胆したのは、（昭和一九年〓著者）一〇月に頭山先生がお亡くなりになったときでした。その知らせが入ったとき、私は勤めに出ていたため父のそばにいませんでしたが、父は「そうか」と一言つぶやいて、流れ落ちる涙をタオルでぐっと押さえていたそうです。「病名は何か?」「胃潰瘍だそうです」「ではお苦しみになっただろうな、奥様はお傍におられたか?」「おられたようです」それきり、何も聞きませんでした。父は、一度でいいから、頭山先生を独立したインドにお連れしたいという思いを持っていたようです。できれば、復興が叶ったアジアを、先生とともに廻りたかった。それまでは、何とかがんばろうという

思いでいたにもかかわらず、先生がついにお亡くなりになり、がっかりしてしまつたようでした」と回想している。ボースが原宿の自宅で亡くなったのは、昭和二〇年一月二一日のことで、頭山逝去後わずか三か月弱のことであつた。享年五八歳である。

ボースが日本で厚遇を受けたことにより、多くのインド人志士や青年が日本を訪れ、ボースや頭山を頼つた。ボース、孫文、金玉均以外にも頭山満が世話をした外国の人物は多い。ボースの関係では、アフガニスタン政府顧問R・M・プラタープ(プラタップ)、ガンデイ主導の第一次非暴力運動に参加した国民会議派活動家A・M・サーハイ、柔道を習うために来日し、のちボースを支えたデーシユ・パーンデー⁽³⁶⁾がいる。ほかに、フィリピンの革命指導者で後の大統領アギナルド、フィリピン独立軍の老将リカルテ将軍、情熱的な反米革命家のB・R・ラモスらはたびたび頭山の励ましを求めた。ベトナム独立運動の先駆者コンデイも頭山と親しい関係にあつた。先のチャンドラ・ボースも渋谷の頭山家で大アジア主義の理想について強い励ましを受け、頭山を師父と仰いだ。⁽³⁸⁾また、トルコのイブラヒム、ロシアから追放され、東京や神戸に滞在していたイスラム教僧正らを支援し、⁽⁴⁰⁾彼らの回教連盟作りを援助した。⁽⁴¹⁾イタリアに併合されようと

するエチオピア支援にも乗り出している。⁽⁴²⁾

3 蒋介石との約束と平和への願い

頭山は、明治三二(一八九〇)年に父亀策を病気で失い、明治二五年に居住地を福岡から東京に移し、明治三〇年には峰尾夫人が子ども達と共に上京し、牛込・納戸に住むようになり、にぎやかになる。このあと、永田町(二丁目六五番地)に一時居を移した後、明治三九年には、北海道夕張炭鉱を売却した資金の一部を使って赤坂・靈南坂(二四番地)に転居し、一七年間ほど住み、ここで孫文やボースらを庇護した。大正四(一九一五)年、頭山が還暦を迎えたころ、破損著しい頭山の家を玄洋社系の実業家・相生由太郎が資金を引き受けて改装した。⁽⁴⁴⁾大正七年に頭山は夜中卒倒し、一時人事不詳になつたことがあつたが、回復した。⁽⁴⁵⁾大正一二年九月に関東大震災があつた。頭山夫妻はこの時、御殿場の小規模な山荘にいて無事であつたが、自宅を焼失し、世田谷の国士館の敷地内の教員住宅に住む長男立助氏など息子らの家を転々とした。しかし、親交のあつた銀行家が土地と屋敷を提供してくれ、旧黒田藩の土地であつた渋谷・常盤松(一二番地)に居を移した。頭山六九歳のときである。以後、亡くなるまで約二〇年間ここに住まつた。

この常盤松時代、すなわち頭山の晩年は、アジア諸国の独立と共存共栄という頭山の想いに反し、日中戦争への突入などの情勢に入っていく。この時代、頭山らは蒋介石、黄興、汪兆銘（汪精衛）など数多くの中国留学生と親交を結び、かれらの独立運動を支援した。

孫文没後の後継者となったのは、文事面では、胡漢民と王精衛、軍事面では蒋介石である。

蒋介石（一八八七—一九七五）は、上海に近い浙江省で塩商人の息子として誕生。九歳で父が死去し、一九歳で革命家孫文の名を知る。二〇歳で渡日、半年ほど東京の清華学校で学び、日露戦争勝利後の日本の情勢を知る。明治四〇年、日本陸軍士官学校留学。このころ「中国革命同盟会」に加入し、孫文を知った。明治四四年の辛亥革命に参加し、先鋭隊の指揮官の一人として杭州を占領した。大正一三年には大本営参謀長となり、のち黄埔軍官学校の校長となる。孫文は国共合作方針を打ち出した後、大正一四年に他界。大正一五年七月、蒋介石は国民革命軍総司令として、全国統一を目指し、広東（現広州）から革命軍を率いて中国北部の軍閥を倒すべく北伐を開始した。翌年四月、「反共政変」を起し、四年間の国共合作を終わらせた。

国共合作を終わらせ、反共路線に転じた蒋介石だが、

その地位は不安定であった。さらに反帝国主義ナショナリズムの沸騰による長江一体の外国人租害地の襲撃（南京事件）や排日運動の中にあつて、彼は党内抗争を避け、昭和二（一九二七）年一〇月、長崎経由で東京に来た。当時の日中関係から、日本ではおおむね彼に冷ややかな反応ではあつたが、彼は頭山家の隣の川野長成宅に数日住み、先師孫文の親友である頭山を朝夕訪ねてその大アジア主義の精神について教えを乞うと共に、その周辺の浪人と親交を得て、将来の日華友好提携を約束した⁴⁶。この時、頭山は蒋介石に、日本に背いてはならないこと、赤化を防止すること、アジアは「徳と力」で一つに団結しなければならないことを強く説いた⁴⁷。

やがて蒋介石は国民党の要請によつて一二月に帰国の途についた。帰国後彼は、翌年四月に第二次北伐戦を行い、七月にそれを完遂した。翌昭和四年、中国を統一した国民政府は、南京に国父孫文のための壮大な中山陵を建設し、六月一日の孫文奉安祭に、頭山満と犬養毅らに革命の援助者・国父の親友として、国賓として招待し、篤く礼遇した。その際、萱野長友⁴⁸ら明治以来の革命支援者十数名が随行し、また、陳少白、胡漢民、戴天仇らの友人が一行を歓迎した。

この日華友好のシンボルというべき孫文奉安祭が行わ



南京における孫文奉安祭(昭和4年6月1日)の前(同年5月29日)の記念写真。右から一人おいて蒋介石、犬養毅、左端頭山満(藤本尚則『頭山満翁写真伝』より)

れた年を最後に、事態は憂慮ある方向に進んでいく。中国国民党のナショナリズムは、孫文が嫌った英米と結び、かつ、友好であった日ソ排撃に向かったのである。国民党政権下の満洲において、張作霖・長作良親子は、ソ連との戦闘を企てたが失敗し、今度は、米英の支援を受け

て矛先を日本帝国に向けて至った。ついに、満洲の関東軍は、日本政府の意図を無視して、昭和六年九月に満州事変を発生させた。頭山にとって最悪の事態であった。折りしも同年一二月、第二次若槻内閣崩壊の後を受けて、頭山とともに三十数年間日華問題の同志として手を携えてきた同じ年の犬養毅が首相として内閣を組閣した。

満洲国建設反対の犬養は、就任式が行われたその日に、孫文の支援者であった萱野長友を首相官邸に招き、ただちに南京に飛び、知己の中国要人らと会って、問題解決の端緒をつかむよう依頼した。中国語に堪能な萱野は国民党長老らと懸命な地下工作を行い、和平協定が結ばれる寸前の昭和七年五月一五日、犬養首相が暗殺されるという「五・一五事件」が発生した。頭山にとって長年の同志を失うと共に、日華和平の道が閉ざされるとい痛恨の事態になった。しかも頭山の三男の秀三がこの事件に関与していたのである。「犬養さんとは心を許し合っていた。あの時の祖父は立ち上がれないほど衰弱していました」と孫の大藤実^⑩は振り返っている。なんとか日華の直接戦争を回避していた蒋介石は、昭和一二年の盧溝橋事件以来、米英の後ろ盾の下にやむをえず抗日に転じ、日中戦争に突入することになった。日中が相い戦うのは米英を利するばかりであるとして、頭山は病中自ら

書をしたため近衛首相に対し、南京攻略と共に速やかに自らいっさいの行きがかりを放擲して時局收拾にあたるべきだとの進言をするとともに、玄洋社社員・萱野を上海と香港に派遣して、事変の推移を監視させた。しかし頭山の預言に違わず、米英は常に蒋介石の勢力を裏面から操縦して、一歩一歩深みに引き入れ、事変は拡大に向かう。頭山の息子頭山秀三は、日中間を行き来し、中国革命に尽くした萱野と共に和平工作に奔走し、国民党と妥協点を見つけて準備が整ったところで、頭山の登場を求める計画であった。

事実秀三は、昭和一四年春に家族四名と共に上海に滞在し、和平工作を進めた。また、玄洋社社員で朝日新聞副社長の緒方竹虎（一八八八—一九五六）も東久邇宮とともに和平のために、頭山の力を借りようとした。

東久邇宮は、大正九年、兄・久邇宮邦彦親王の娘・良子女王と皇太子裕仁親王殿下とのご婚約問題への頭山の関わり以来、頭山と親交が厚く、昭和四年の国史館専門学校（33）の設置に関し、一二月に国史館視察に及び、以来、国史館並びに頭山らと交流を深めていたのであり、また、日中が戦ってはならないという考えでも、東久邇宮と頭山らとは気脈を通じていた。

東久邇宮稔彦親王（終戦直後の内閣総理大臣）は『私

の記録』にこう回顧している。

「昭和一六年九月のある日。私は頭山満翁に特に来邸を求めて、日華問題について懇談した。日華事変が、年を累ねて解決しないのが憂慮にたえなかつたからである。

頭山翁は、辛亥革命に際し、大養毅氏と共に上海にわたり、旧誼によって孫文、黃興等を援助した。元來、頭山翁は、人の国の衰運に乗じてその領土を盗むようなことが非常に嫌いで、朝鮮の併合も反対、満洲事変も不賛成であったが、殊に日華事変に対しては、日本の軍閥やその亜流の政治家が、独善的な新秩序論を唱えて、非道の侵略を企てることを心から憤っていた。（中略）翁の口から蒋介石に国際平和の提言をすゝめてもらうことを考えたのである。（中略）

こうした考えから、私は頭山翁に

—日華が牆に相せめぐ今日の状態は、お互いに憂慮にたえない。このまゝ、推移すれば、世界の禍乱にならぬとも限らぬ。あなたも既に老齡ではあるが、最後のご奉公として、日華の和平のために一肌ぬいでもらえまいか。重慶に出かけて行ってひと働きやつてほしいと思うが、どうだろうか—

という、頭山翁は、しばらく黙考していたが、やがて

重い口を開いて、たゞ一言

—最後のご奉公をいたしましょう。

と答えた。(中略)

ところが、当時の東条陸相にこのことを話すと、彼は、いやな顔をして言下に

—その時期ではない。そんなことはやめてほしい。と、いう。

東条陸相に話をつけない限り、すべての問題は動きがつかぬからであった。」(一部現代かなづかいに改めた著者) 太平洋戦争が勃発した時も、東条総理に蒋介石に話を進めることを提案したが、彼は、絶対反対であった。

頭山秀三によると、(和平工作に中国に行こうとする秀三に)「中国に行くか。元気で行ってこい。中国が米英と協力して日本と戦う、これは真実ではない。おれは孫文、蒋介石と約したことが真正なる中国の心と信じて疑わない」と頭山は語った⁽⁵⁵⁾という。蒋介石は「頭山となら会ってもよい」と伝えてきた。蒋介石が一四年前に頭山邸を訪れ、「両国の交わりを失ってはいけない」と約束したことを忘れてはいなかった。しかし、近衛内閣が総辞職し、陸軍の東条英機が首相になっており、会談は実現しなかった。⁽⁵⁶⁾一方、親日派の汪兆銘の対日和平工作は、昭和一五年に南京政府を樹立したまでではよかったが、

謀反者の烙印を押され、失敗に帰した。

いかなる和平工作もかなわず、日中戦争が勃発すると、頭山は息子の秀三を部屋に呼んでこう語った。「ばかなことが始まった。蒋介石氏は日本と中国が助け合わねばならぬことを最も解し得る中国人であることはおれが一番よく知っている。いかなる耐え難い問題が持ち上がるうとも、日華の交わりを失ってはいけない。そのことをおれは蒋介石氏と固く約して別れたのだ⁽⁵⁷⁾。また、孫の大藤は、「祖父はいつも、日本と中国は兄弟だ。けんかをするのはいいが、深入りはいかん。最後は日本を救うために、おれが出ていく。蒋介石と会う、と言っていたが、しかし、軍部が祖父を取り囲み、動けなかったのです」と述べている。⁽⁵⁸⁾

4 晩年

晩年の頭山は、よく御殿場の山荘に滞留した。そこは富士山が一番よく見える場所を役場の人が見つけ、地元の人が土地を譲ってくれたものであるという。毎朝、百枚もの揮毫をし、終わってから山荘より約一キロの二岡神社に参拝するのを日課とした。昭和一六年に頭山の精神的後継者の長男立助(国士館高等部第二期生)が病没する。昭和一九(一九四四)年一〇月四日、頭山は山荘

の居間で囲碁の棋譜を見ながら、碁盤に向かっている時に倒れ、妻の峰尾に看取られて他界した。享年九〇歳の長寿であった。これを知った中国では、重慶や南京などで弔旗が掲げられ、死を悼む行事が営まれたとい⁵⁹う。

おわりに

改めて頭山満の生涯と活動とを振り返ると、頭山は、筑前・福岡勤王の志士たちに育てられ、西郷隆盛を敬愛し、その道義主義・徳治主義を受け継ぎ、板垣退助の自由民権思想に感化され、やがてそこから転じて、国権主義へと傾き、最後に、金玉均や孫文やボース支援などを通して、大アジア主義へと軸足を移すダイナミックな人生であった。その底には、一貫して、弱者を励まし支援する道義精神と、徳によって収めることを理想とする東洋的徳治主義が流れていたと言える。

性格を分析すると、終始政治問題にかかわったということ、リーダーシップを主体とする政治家タイプであることは間違いない所であるが、一生、無位・無官を貫いたのであって、代議士になって政権の座にいたり政治の表舞台で活動する政治家タイプではない。無位・無官ということは、一方で「浪人」に分類されるであろうが、

単なる「浪人」とは全く異なる存在であった。無位・無官の人物は、あらゆる地位・肩書がないことであり、純粹に人格そのものがむき出しになって踊り出ている状態にある。つまり、人がその人物と関係を結ぶのは、地位や金銭や権威が目的ではなく、その人物の人格そのものの魅力に魅かれるからである。頭山は、いわゆる右翼と呼ばれるナシヨナリストのみならず自由民権派や左派の人々と人脈があり、政治家、経営者、軍人、文人、庶民などあらゆる階層の日本人に慕われ、ネットワークを築いた。のみならず、韓国、中国、インド、そのほかのアジア諸国の人々と広いネットワークを築いた。それらの数限りない人脈の支援を受けて、彼は、自己の政治的理想念現に向かったのである。西郷隆盛の、「命もいらず、名もいらず、官位もいらぬ人は、しまつに困るものなり」と述べた人物像を頭山に当てはめることができるであろう。

頭山はたびたびの勧めにも拘らず、どのような職にも就くことはなかったが、広い同志的ネットワークから必要な時に必要な経済的支援が常に与えられた。そして人が欲しいと言えば、大切なものであるうと、お金であるうとあげてしまった。経済観念がまったくないかと思うと、自然に経済のやりくりがなされた。経済人ではなかつ

だが、金銭を使う達人であった。一時炭坑で八十万両ほど儲けたことがあったが、ひと月と経たないうちに必要な人にあげてしまうという具合であった。彼は、また、芸術やスポーツ方面にもかかわりがあり、決して無粋、無趣味な人物ではなかった。漢詩を吟じ、碁を愛し、囲碁仲間が多数いた。雄渾な書を毎日のように揮毫した。革命家・宮崎滔天は一時浪花節で生計を立てていたことがあったが、彼が中国から康有為及び陳白を伴って頭山邸をたずねると、頭山は琵琶を弾いて彼らを歓待した。そして、頭山は絶えようとする筑前琵琶の普及に努めたのであり、日本の伝統文化をとぎらすことなく後世に長く伝えたいという思いを頭山は抱いていた。古来九州は相撲の盛んなところであり、頭山は少年時代に近隣の仲間と盛んに相撲を取っていた時期がある。成人してからも自ら相撲をとったのであり、晩年の常盤松の自宅には土俵を持ち、相撲の大好きな国士館の柴田徳次郎とも相撲趣味で気脈が通じていた。彼は、「相撲こそ国技ぢや。全力を打ち込んで、花々しく勝負を決するあの呼吸は武道の気合と同じであり、剣も禅も一如ぢや。(中略)こゝ、二三十年、どんなことがあつても、相撲だけは欠かさん様に観に行きよる」と述べている。また、猫をかわいがっていた。

性格タイプで、人への愛情価値に生きる人々がいる。医師、看護師、教師、そして母親などである。頭山は海外人を含め多くの人々を愛し、友とした。そういう意味で、愛情・友愛の人と言うことができる。酒は全く飲まず、タバコも吸わなかったが、多くの友人や彼に師事する人、慕う人が周囲に集まった。彼は、政治的価値に生きるタイプではあったが、むしろ権力よりも愛に傾いた珍しいタイプではなからうか。また、いわゆる真理追求に生きる学者タイプではないが、記憶力抜群で、若い頃学問した内容を終生覚えていた。成人してからもよく学んで漢文の素養を磨いた。その学問の仕方は、緻密・綿密かつ実証的に積み重ねるのではなく、直観によって真実を見極めるタイプであり、同じように、人物の真相を瞬間的に見極めた。

頭山は、若い時仙人修行したが、晩年に至り、敬神の人となった。自宅に安置した西郷隆盛の像の上の神棚の前で毎日手を合わせ、毎朝神社に参った。「敬天愛人」を地で行ったのである。諏訪神社を訪れたときには、社前で足袋裸足になり、額を社頭の砂にすりつけんばかりにして礼拝すること極めて丁寧にし、しばしの間頭を上げず、並みいる人は、その敬虔な姿に打たれ、森閑とたたずんでいたが、澄んだ拍手の音に我に返った。

以上のように、人がどういう価値を主軸にして生きるのかを分析する了解心理学に基づいて頭山の性格を分析すると、政治家タイプであるのはもとより、それに愛情的要素と敬神的宗教的要素を晩年に色濃く備えた特異なタイプであったと言えよう。柴田徳次郎が頭山と出会ったのは、まさにこの頭山の壮年期後期から老年期にかけての時期であった。この時期の人間関係は、年長者から年少者への教育的感化が強く及ぶ時期である。そのことが、両者の絆を強くしたに違いない。この点は別の機会に論じたいと思う。

しかしまだこれだけでは、頭山という人物を語り尽くしてはいない。西洋的性格分析に加えて、東洋的人格要素に着目した分析を加える必要がある。

頭山を深く信頼した中江兆民は頭山を「頭山満君、大人長者の風あり、かつ今の世、古の武士道を存して全き者は、独り君あるのみ、君言はずして而して知れり、けだし機智を朴実に寓する者といふべし」と評している。

この「大人長者」あるいは「武士道」の権化といい、その表現は東洋的理想的人物像を示している。その理想像は、孟子の「富貴も淫すること能わず、貧賤も移すこと能わず、威武も屈すること能わず」とする志を持った「大丈夫」に値する人物像であり、頭山自身が強者を圧する

だけの気魄と力を備えた東洋的「豪傑」あるいは「国士」のモデルであったと言えるのではないか。彼は、寡黙であったがゆえに、無言のうちに伝わる感化力を身に着けていた。また、両極端の思想を包み込むような懐の深さ、深遠さを持っていた人物であった。そしてまた、勤王の伝統を受け継ぎ、皇室を尊敬する念を生涯持ち続けた人物であった。

(完)

*これまで頭山の大アジア主義との関連で、朝鮮の志士金玉均、中国の改革者・孫文、インドの志士・ビハリ・ボースを象徴的に取り上げたが、この他に頭山が関与したヨーガに基づく実践哲学者・中村三郎(天風)、インドの詩聖タゴール、及び後の昭和天皇の婚約者・良子殿下に関する「宮中某重大事件」などについては、紙幅の関係でここに掲載することが出来なかった。ご理解を賜りたい。

註

(1) 頭山満翁正伝編纂委員会(西尾陽太郎解説)『頭山満翁正伝 未定稿』(葦書房、一九八一年)二七二頁。

(2) 頭山満『頭山満言志録』(書肆心水、二〇〇六年)一
二九頁。

- (3) 前掲註(1)二四三頁。
- (4) 葦津珍彦『大アジア主義と頭山満』(葦津事務所、二〇〇五年) 六五〜六六頁。
- (5) 柴田徳次郎編『頭山翁清話』(大民社出版部、一九四〇年) 一五七頁。
- (6) 鈴木善一『興亜運動と頭山満翁』(照文閣、一九四二年) 五五頁。
- (7) 同前五七頁。
- (8) 前掲註(4)一一九〜一二二頁。
- (9) 同前一二二頁。
- (10) 頭山統一『筑前玄洋社』(葦書房、一九七七年) 二三一頁。
- (11) 同前二二九頁。
- (12) 前掲註(4)一二四〜一二七頁。
- (13) 前掲註(1)二四六頁。
- (14) 前掲註(6)一三〇〜一三一頁。
- (15) 前掲註(4)一二八〜一二九頁。
- (16) 前掲註(6)五六頁。
- (17) 井川聡・小林覚『人ありて―頭山満と玄洋社』(海鳥社、二〇〇三年) 一七五頁。
- (18) 田所竹彦『孫文 百年先を見た男』(新人物往来社、二〇一一年) 六〇頁。
- (19) 藤本尚則『頭山満翁写真伝』(葦書房、一九八八年) 二六頁。
- (20) 前掲註(4) 一八九頁。
- (21) 前掲註(19) 三七頁。
- (22) 前掲註(17) 一八〇〜一八一頁。
- (23) 長谷川義記『頭山満評伝』(原書房、一九七四年) 九五頁。
- (24) 藤本尚則『頭山精神』(大日本頭山精神会、一九三九年) 二三〇〜二三二頁。
- (25) 同前二三五〜二三七頁。
- (26) 相馬黒光「ラス・ビハリ・ボース覚書」竹内好編『アジア主義』現代日本思想体系9 (筑摩書房、一九六三年) 一七五頁。
- (27) 前掲註(24) 二三七〜二四〇頁。この原文は、昭和八(一九三三)年五月の『現代』による。
- (28) 前掲註(26) 一八四〜一八五頁。
- (29) 同前一九三頁。
- (30) 相馬黒光「義母となって親しく見たラス・ビハリ・ボース」相馬黒光・相馬安雄『アジアのめざめ』(東西文明社、一九五三年) 三三九頁。
- (31) 前掲註(17) 一八八頁。
- (32) 前掲註(30) 三四一頁。

- (33) 前掲註(19)五四頁。
- (34) 樋口哲子『父 ボース』(白水社、二〇〇八年) 四二〜一四三頁。
- (35) 同前一七六頁。
- (36) 同前一九二〜一九三頁。
- (37) 浦辺登『靈園から見た近代日本』(弦書房、二〇一年) 一〇六頁。
- (38) (39) 前掲註(4)二二九〜二三〇頁。
- (40) 前掲註(19)五五頁。
- (41) 前掲註(23)一二五頁。
- (42) 前掲註(17)一八九〜一九二頁。
- (43) 前掲註(23)九〇頁。
- (44) 同前一一六頁。
- (45) 同前一三四頁。
- (46) 前掲註(4)一九八〜一九九頁。
- (47) 前掲註(19)四〇頁。
- (48) 萱野長知(一八七三―一九四七)は、土佐藩の山内家の系列出身の自由民権論者で、日露戦争時に満洲義軍に参加、長く中国にとどまり、中国通になった人物。
- (49) 前掲註(1)二七六〜二七八頁、久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』(汲古書院、二〇一一年) 三六四頁。
- (50) 前掲註(17)二三一〜二三二頁。
- (51) 前掲註(1)二八一頁。
- (52) 前掲註(17)二三三頁。
- (53) 創立80周年記念事業運営委員会『国士館80年の歩み』(学校法人国士館、一九九七年) 三三三頁。
- (54) 東久邇宮稔彦『私の記録』(東方書房、一九四七年) 五九〜六四頁。
- (55) 前掲註(17)二三三頁。
- (56) 同前三七頁。
- (57) 同前三四頁。
- (58) (59) 同前二五〇頁。
- (60) 前掲註(6)一一四頁。
- (61) 宮崎滔天『三十三年の夢』(岩波書店、一九九三年) 二六頁。
- (62) 前掲註(17)一九四〜一九七頁。
- (63) 前掲註(6)三〇頁。
- (64) 前掲註(23)二一三頁。
- (65) 前掲註(6)六九頁。
- (66) 中江兆民『二年有半・続一年有半』(岩波書店、一九九五年) 八九頁。
- (67) 前掲註(2)九八頁。